④グループ：公的機関に勤務する精神保健福祉士

カテゴリー	重要カテゴリー	重要アイテム
司法書士への認識	司法書士は法律家でハードルが高い	司法書士さんは法律家ですので、正直ちょっとハードルが高いというかお近づきになりづらい印象で、たまたま少しかかわっていただいた方はいいのですけれども、いきなりご連絡してとか何とかというのはちょっとしづらい。
	司法書士と報酬	司法書士さんに何かお願いするときは必ず報酬の話が出てくるので、やはりお金の話は切り離せない。
	自殺予防に関心をもつ司法書士は少ない	自殺予防に関心をもつ司法書士は少ない。
司法書士とのこれまでのかかわり	司法書士との顔の見えるつきあい	私の地域は人口数から考えても、顔が見えると感じています。
	付き合いがなかった	司法書士さんにはお会いしたことないと思う。
		これまで付き合いはなかった。
	自殺の相談研修講師を司法書士に依頼	自殺の相談研修で司法書士さんと自殺問題とのつながりについてお話ししていただく予定。
	一緒にやっている自殺対策会議でキャンペーンを実施	一緒にやっている自殺対策会議で、９月の自殺対策強化週間に、３県市、県内で合同の統一キャンペーンを実施。
	司法書士との合同相談会の実施	（市民相談室の業務）司法書士さんとの多重債務の相談日を企画して、昨年度ぐらいからやっている。
		自殺対策に関する包括相談会の開催にあたって、司法書士会と弁護士会と県のセンター、三者で集まって、どう運営していくかというのを調整。
	自殺対策に関する司法書士とのかかわり	自殺対策ということで何かができているわけではないのですが、今回は司法書士さんとのかかわりもある。
	後見人としての司法書士とのかかわり	後見をお願いするなどの相談はずっとありますが、自殺という観点では接点はない。
		ケアマネジメントで市の人とかかわっていた人に後見人がついたときに、ケア会議に参加された司法書士さんに会ったのが唯一の機会。
	成年後見に関する連絡会等でのかかわり	成年後見の市長申し立てで、司法書士会さんと同じぐらいずっと、いろいろな個別のやりとりから、それから連絡会議もやっていました。
	法律相談と成年後見等における個別の相談	法律相談の事業で司法書士を依頼。成年後見等における個別の相談も依頼。
自殺対策をめぐる現状と精神保健福祉士	世の中全体の変化	福祉関係だけではなくて、成果主義とか、全体のつくりで、何というのでしょうか、世の中全体が変わってきていて、その２つのあらわれなのかなと、自殺者数が減らないのは。
	自殺（未遂）者の疾患の多様化	司法書士さんのほうも、せっかく債務を整理したのに、その後自死される方がいる。それがきっかけになっていらっしゃるようで、聞いたことがあるのは、多重債務相談に来られればいいのだけれども、今、問題視されているのは、債務すらつくれない人、要するにお金を借りられない人への対応とのこと。

カテゴリー	重要カテゴリー	重要アイテム
		個人的に、統合失調症の方で自殺された方は結構多いですし、正確には思い出せないけれど、発達障害の方で亡くなっている方もいたと思います。今はうつの対策が重要視されていますが、アルコール依存の方もうつと合併している人は多いのだけれど、アルコール依存や薬物などで自殺する方も結構多い。
		アルコールも結構潜在化して、私も病院勤務時代に、20数年前になりますが、退院されたのち、１人が自殺、２人が原因不明の変死、２人は行方不明になってしまった。非常に自殺が伴うのだなあというのはそのときに思いました。
		自殺と思われる方の亡くなった場所を地図で調べてみると、やはりその簡宿のあるエリアが一番多かったのですね。そこは、アルコールとか貧困の問題がとっても高い。
	全部リセットしたいという意味での希死念慮	相談していると必ず「死にたい」と言う人、嫌になったから全部リセットしたいという意味で死にたいと言うのですけれど、結構多い。
	相談にのる時間がない	自殺対策は、モデル地区を設けてやっていますが、実際その相談が上がってきても相談に対応できる時間がない。これが本当に現場の実感的な話。
自殺対策への精神保健福祉士としてのかかわり	精神保健福祉センター一丸となっての取り組み	自殺対策に関しては、精神保健福祉センター一丸となってやっていかなくてはいけない。これからもより一層やっていく、進めていく。
	地域自殺対策緊急強化交付金の関係する担当課	相談内容が多様化。地域自殺対策緊急強化交付金の関係する担当課にもなっている。
	自殺対策も真っただ中	通常の業務にプラスして自殺対策も真っただ中。やっとそれぞれの市町村で自殺対策の主管課が決まったというところ。
	自殺予告に対する予防としての警察への通報	救急医療情報センターへ自殺予告が結構舞い込んでくる。ボーダーの方、そんなこと言うなら死んでやるみたいな声もあるけれど、これは本格的にまずいぞという案件が結構最近出てきていて、危機度をチェックしようというので、危機度の高いものについては、そこにいたスタッフで相談をして、警察に通報しようということを今、取り組んでいる。
	自死遺族支援への取り組み	うつ病の当事者ミーティングを月１回と、今年から自死遺族支援として、いのちの電話と共催で講演会をしたり、自死遺族の方の自助グループに会場提供をして、うちの保健所で定期的にしていただくような試みを開始している。
	死ぬつもりの人は確実に死ぬ方法を選ぶ	死ぬつもりの人は本当に確実に死ぬ方法を選ぶというし、人格障害の人は、どこかでやはり、助かりたい。
	防げない自殺もある	支援者は残念ですが、防げない自殺もあると思っていかないと、私たちが燃え尽きてしまう。ただ、防げるものは防いでいきましょうよというスタンス。
	思い浮かべる人もいなくなった方が一番支援が必要な方たち	思い浮かべる人もいなくなった方が一番実は、支援が必要な方たちであって、その人たちをどうするかという話。ほとんどの方は、そういう機会もなくて、通り過ぎてしまうのだろうと思う。
	当たり前の人と人との支え合いの重要性	ごく当たり前の人と人との支え合いが、言葉にするとすごい薄っぺらい言葉になってしまうけれど、そういうことをきちんとやっていくことが本当に大事なのではないか。そういうようなことを引き継いで。

カテゴリー	重要カテゴリー	重要アイテム
自殺対策における精神保健福祉士の課題	相談を受ける窓口がわからない	窓口がない点だとか、そこら辺なんですよね。やはり受ける理由も、本当にここでいいのか、それとも別のところで何かなんていうあたりでは、今日は、９割の方が何らかの病気があるので、やっぱりうちで受けたほうがいいんじゃないですかね。
	ホームドアによる自殺件数の減少	安全策として乗務員を必要最小限にするために駅のホームドアはつくってあるのですね。本来は。ですが、副次的な効果として、ホームドアを設けられていると人身事故が減少。
	防護柵による自殺件数の減少	警察統計が公表されるようになったので、あそこって（自殺の名所）ある警察が所管しているのですけれど、そこの統計を見る限りは、防護柵ができてから自殺件数が明らかに少なくなっているのです。
	自殺率の高い地域における自殺対策	ほかの地区に比べて明らかに自殺率が高いという。しかも、当たり前なのですが孤独死が多くて、来年あたりからそれこそ基金を使って、ドヤ街に特化して何か対策を講じられないか、何かやっていこうかと思っている。
	地域の個別性を把握した事業化の必要性	場所によって違う、同じことをやっても全然違うから、その地域の問題点を、その一番問題多いところにターゲットを絞って事業化しないと助からない。
	社会資源にうまくつながらない難しさ	女性相談所などを紹介するのですけれど、そこをつなぐのがまた大変で、やはりうまくいかないと戻ってきてしまう。そのつなぎをきちんとしないと、ただ電話であそこ行ってくださいでは、とてもつながらない状態もあったりする。
		紹介しても行かないことのほうが多いので、ちゃんと見守ってつなげないと、うまくいかない。
		心の健康を扱うところが県も何もそうじゃないですか。そうすると、そっちばっかり行っちゃって、結局、大体みんな経済的に追い詰められたりなどの原因があるのですけれど、その原因を解決しないままになってしまう。
	関係者も自死遺族	関係者も自死遺族なんですよね。やはりかかわった方が亡くなったりすると。だから同じことになっているんですよね。直接の身内じゃないけれど。
	死に様の選択肢として学習された自殺の連鎖へのアプローチの必要性	遺族の会に出ると、自死というのは遺伝はしないけれども、死にざまの２つの選択肢として学習されるといいますよね。今日の人もやっぱりそうだったのかなというような気がして、その自死の連鎖みたいなものも同時に何とかできないかなというのが課題。
	精神科につないでも解決できない問題	結局精神科で対応できる部分は限定されているんだと思うのですよね。本当に必要な医療にどうつなぐかとか、それは普段からやっている中でやれること。
		精神科を受けると、経済的な側面ではなくて、どうしても精神の方ばかり強調され、肝心のお金とか仕事とかそういうことはどうなんだという話で、やはり庁舎内でもかなり議論になったのですけれど。精神疾患は精神科を受診すればそれで終わりというような、そういう短絡的な問題ではないのではないか。
	自殺企図を繰り返す人へのかかわりの難しさ	３回ぐらい飛びおりをしている人が家族と一緒に相談に来られて、病院の受診までつなげたのだけれども、本人がどうしても入院したくないということで、入院にならなくて、３日後にまた飛びおりて、ほとんど寝たきりの状態になってしまった。何とかできなかったのかと。
		最近パーソナリティ障害の方が、頻回に過量服薬とかリストカットをして、救急搬送されるケースについては、まずその家族支援、家族教室、SSTなど、やはりご本人の対応の仕方のようなところをやっていかないと。

カテゴリー	重要カテゴリー	重要アイテム
	行きつくところがあるのかという不安	その人その人を取り巻くいろいろな問題をクローズアップできれば、どこかでかかわれていたはずなのにという問題が山積みしてあるのが、今回、国の研修では前面に出したよ、という、聞けば聞くほど何していいかわからないと。
		自殺とはいうけれども、とってもとっても奥が深くて、底がないような、ちゃんと行き着くところがあるのだろうかと思うような、何かこう、深い底のない沼に引き込まれそうな、そんな気がしたりする。
		広大な砂漠にひしゃくで水まいてる気持ちと仲間と表現することがあって、これがどれだけ成果として芽が出せるのか、緑になっていくにはどうなんだろうと、時々ふっと本当に、いつまでひしゃくでまかなくてはいけないのか、と思うときはやはりありますよね。何かあまりにも課題がたくさんありすぎて。
	みんなでひしゃくで水をまく	砂漠にひしゃくで水まく感じと思ってるのですが、やはり皆さんとこうしてお話ししていると、私たち２人でまいているわけではないと思えて、いろいろなところでまいていて、これが多分いっぱいになったらいつか、いつか芽が出るかなと感じでいけたらいいのかなという、いつもそういうふうに思って、自分自身が仲間とつながることが大事だなと。
	家族病理における自殺と家族支援の必要性	家族の問題の中で、何かだれか犠牲になって亡くなっているというパターンが多くて、そういう方は、精神科にかかっても、結局病気じゃないからということで、治療とか、確かに治療の範疇ではないのはわかるのですけれど、それで結果、ひとりで山の中に入って亡くなったとか、そういうことも多くて。
	自死遺族へのサポートの必要性	自死遺族の方はやはり、周りから責められる。
	司法書士と連携する場合の自殺対策の焦点	司法書士さんとの連携でと考えたときに、言い方悪いけれど客層が違うのかなという気がして、だからそれをごっちゃにして対策をと考えていくと、すそ野があまりにも広い。
	重要なのは生活上の具体的課題の抽出	何か精神の問題にされると、本当に社会的なこととか生活上の具体的な課題が見えなくなってしまって。
精神保健福祉士のメンタルヘルス	自責の念に駆られる	一端目を離したすきに、家に火をかけて亡くなってしまった。そのときに、今の話で、私たち全然仕事にならなくなって。何かいろいろこう、やり方に間違いはなかったのかと、そのときも一緒に担当した保健師ともいろいろ考えて。
	自死に関する周囲の慰め	私も随分と自死というのはありましたけれど、病院にいるときも周りは精神科の先生ばかりだったということで、怒られたということはなかったですね。むしろ、慰められた。
調査において知りたいこと	精神保健福祉士との連携へのニーズ	どういうケースの場合に我々と、精神保健福祉士あるいは保健師でもいいのですが、連携をとりたいと思ったのか。
	関係機関との連携	関係機関と連携して対応したこともあるかどうかとか。
	今の自殺対策は有効かどうか	今の自殺対策は有効かどうか。
	精神的問題を抱えている比率と転帰	精神的な問題があると思われるのはどのぐらい問い合わせがあったのかとか、その帰結。どうつなげたのか、それで解決したのかどうか。
	精神保健福祉士の周知度	そもそも精神保健福祉士をご存じじゃない方も結構多いのではないかなと思う。

カテゴリー	重要カテゴリー	重要アイテム
	このインタビューでの啓発と今後への意欲	センターは取り組み始めたばかりなので、司法書士と打ち合わせをする中で何ができるかというのは詰め合っている途中です。ここで出た話を伝えて、いいほうに持っていければ。
	会計システムの透明化	ビジネスになるので、会計システムがわかりやすかったら、こちらも相談しやすかったり、これぐらいだったらお金はかからないかも。
今後の連携	司法書士がかかわる自殺問題への興味	多重債務で自殺する人もいるだろうけれど、それだけが理由かと、いつもクエスチョンがあって。司法書士さんととにかく一緒にやってみて、どんなこと考えておられるのかなというのはそこでわかる。
	司法書士会との連携を	精神保健福祉センター等では、司法書士会の方と連携をとろうということで、交流を始めているようです。これがある程度軌道に乗ってくれば、いろいろな他機関との連携もとっていかなければいけない、とれるようになるのかなという気がします。
	現場レベルでの連携	後見の関係で裁判所にその財産処分の申し立てをするのに、裁判官にこの人はどういう人か、どういう障害があってどういうふうに説明したらいいかという相談をされたときがあって、そのときはこちらでサマリーをつくってお見せしたら、いや本当にこういう人だっていうことで。
	相談機関にきちんとつなげる	ギャンブル依存やアディクションを解決しないままに多重債務だけを解決しても、またギャンブル依存を繰り返してしまうだけで、きちんとその多重債務とギャンブル依存などの関連がわかっている司法書士さんは、多重債務をすぐに解決しない。相談機関にきちんとつなげるようなことをやっていただきたい。
		司法書士の人たちで熱心な人たちはたくさん相談があって、ではこれを公的な機関がありますよ、というアナウンスだけで終わっていったらあまり連携にならない気がする。
	事例を通した連携の模索	今までメンタルヘルスだけにかかわってるわけです。それに今度は全然違う立場で司法書士さんがかかわってくると、こういう問題があるよという、事例化したものを通じてやりとりできるのかと思います。
	それぞれの専門性に立脚した協働	もとの領域にきちんと問題をお返しするという作業を、司法書士の人たちが感じている多重債務という切り口からやっていくというふうにしないと、何かやはり、十把一からげで精神の問題ですよねとなってしまうと、とかく地域で対処に困る。
	システムを機能させ続けること	問題解決のためにどういう連携をして、どういう相談のシステムをつくりましょうというのだけが先行してしまうと、何かうまくいかないような気がする。
		一緒にやるシステムを今回つくってというのが国の動きだと思います。だから一緒にかかわっていくのではないでしょうか。